

令和5年度 第1回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日 時：令和5年7月6日（木）18：30～20：30

会 場：練馬区立区民・産業プラザ Coconeri3階 ホール(西・中央)

1. 事務局長挨拶

お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。本日は、令和4年度の取り組み状況と次期の計画に向けてということで、色々な資料のご説明をさせて頂く。とりわけ、委員長と副委員長に参加して頂き、社会福祉協議会(以下:社協)の職員を交えてディスカッションをし、その時のまとめも報告させて頂く。自由闊達なご発言をして頂き、有意義な時間にさせて頂ければと思う。よろしく願う。

2. 新任委員挨拶

委 員：前任より引き継いで、今回から参加する。協働推進課では、町会自治会の皆様をはじめ、NPO、ボランティア団体等、地域活動団体の方々と一緒に連携しながら、また、サポートさせて頂きながら地域の課題解決に取り組んでいる。今回の地域福祉活動計画についても、皆さまと意見と知恵を出し合いながら、まさにつながりのある地域づくりを目指して取り組んでいきたいと思っている。

3. ハートネット TV フクチッチ『社会福祉協議会』上映

職 員：ハートネット TV フクチッチという番組で社会福祉協議会の特集が先日2週にわたって放送された。ルーテル学院大学の市川先生が先生役になって出演し、文京区社協の地域福祉コーディネーターの動きの一部が放送された。動画として見ていただくのは2回分の中の13分程度。皆さんと社協や地域福祉コーディネーターの動きを共有したく、放映させて頂く。

—放映（ハートネット TV フクチッチ）—

4. 配布資料確認

資料1：練馬区社協 第5次計画の取り組み表 令和4（2022）年度

資料2：第5次地域福祉活動計画 令和4年度取り組み報告書まとめ

資料3：令和4年度成果と令和5年度事業目標

資料4：第5次地域福祉活動計画 推進評価チームの取り組み

資料5：事例④～関わりつつける～

資料6：第5次地域福祉活動計画推進から見てきた課題と第6次地域福祉活動計画策定に向けて

参考資料①：第6次地域福祉活動計画策定に向けたグループインタビューとディスカッションの実施について

参考資料②：グループディスカッションとグループインタビューにおけるキーワード

他：ネリーズ通信 27号、机上配布で委員名簿、8/3 災害シンポジウムのチラシ

5. 練馬区地域福祉計画進捗状況報告

委 員：練馬区の地域福祉計画は社協の地域福祉活動計画と同様に、令和2年度から令和6年度までの5年間を計画期間としている。今年度は8月に推進委員会を予定しており、1年間の取り組み状況と今年度の取り組みの予定と次年度の取り組みの方向性を確認する予定になっている。現在の地域福祉計画は福祉のまちづくり推進計画と成年後見制度利用促進計画を地域福祉計画と一体的に取り組んでいる。令和7年度からは、さらに重層的支援体制整備事業実施計画と再犯防止推進計画を含めて策定を予定している。区の課題の1つとして、複合的な課題を抱えながら、支援に繋がらない世帯に対して区民や地域福祉団体と協働して、早期発見と居場所づくりの場が必要であると認識している。この課題に対応す

るため地域で活動している地域福祉コーディネーターの訪問型の事業により、支援が必要な世帯の早期発見をし、適切な支援機関に繋げる取り組みを開始している。また、居場所づくりとして社会参加に向けた居場所支援を開始した。長期間のひきこもり状態にある方に対して社会参加のきっかけづくりとなるように居場所を提供して就業準備事業に繋げる等の取り組みをしている。再犯防止について、矯正施設出所者の中には、様々な生きづらさを抱え、困難を抱えている方は少なくなく、こうした出所者に対する支援が求められている。再犯防止に関する現状と課題を把握するために今年度から再犯防止推進検討会を開催して皆様からご意見を頂いている。今後、2年度に渡り社協の地域福祉活動計画と方向性を合わせながら策定に向けて進めていきたい。

6. 第5次地域活動福祉活動計画の取り組み状況について

職員：資料1～3で取り組み状況を報告する。

【資料1：練馬区社協 第5次計画の取り組み表 令和4(2022)年度 参照】

具体的な取り組みは各部署、委員会、チーム等が取り組み目標に対して、令和4年度に実施したこと、参加したことでの住民の変化、令和5年度に向けた取り組みを記載している。つながり支えあう地域をつくる(1)住民主体の地域づくり①誰もが参加できる地域活動を推進する①・2 福祉作業所や地域生活支援センター等を中心に商店街や町会自治会の活動に参画し、多様な住民参加による地域活動を推進するでは、コロナ禍でも停滞することなく出来ることをやっぴいこうと地域の商店街や町会自治会等、地域の活性化に向け、各拠点が掲示板の貼替えや駅前清掃、地域清掃などを通して、地域との協働、障害理解への取り組みを行った。また、これまでの地域との関係性を切りたくない、繋がり続けたいとの当事者の思いから、コロナ禍でも安心して取り組む新たな地域活動として、「きらら酉の市」など、自分たちのことを知ってもらおうと、新たな取り組みを始めた。当事者の力を活かした取り組みではそれぞれの生き方を支え合う、権利擁護の視点を持った地域生活支援の推進を、学校と連携し、当事者が自らの言葉で表現して伝える障害の学習会や講座実施にも繋がっている。コロナ禍でも続けてきたこと、当事者と教育分野を繋げている。④-1 地域住民へ向けた防災に関する講座等を行い、災害に備えた地域との関係作りの充実を図るでは、災害シンポジウムの参加者から協力体制を作れる横の繋がり大切さを実感できたとの感想が寄せられた。また、区内郵便局長向けの講座を開催し災害ボランティアセンターの役割の周知と共にお互いの関係作りが出来ている。視覚障害、身体障害がある人達など、そのような立場の人たちから話を聞き、新たな気づきや連携の意識が高まり、アンケートでは、地域福祉の関心が高まった・やや高まったが100%の全員解答となった。(2)分野を超えたネットワーク②地域課題を共有できるネットワークづくりでは、障害、環境が要因で、生きづらさを抱えた方への支援や多様な地域課題を越えてネットワークを構築した。社会生活環境や障害などを要因にして犯罪に関わってしまう・巻き込まれてしまう生活困窮者や障害者への支援について、福祉・司法・更生など分野を超えたネットワークねりま☆共生フォーラムを実施している。社協内の推進部会等でも共有しながら令和5年度は全部署で共有して取り組んでいく。それぞれの生き方を支え合う(1)まるごと認め支えあう仕組みの構築②生活・就労の一体的な支援では、きらら・ういんぐ・レインボーワークの3部署で連携しながら多様な働く機会を知る機会や社会参加のきっかけとすることを目的にトライアングルゼミを開催した。一人ひとりに合った社会参加に繋げるとともに、当事者同士の語り合いを通じ、気づきや多様な価値観の共有等に繋がっている。今年度はさらに参加支援を意識しながら内容の充実を図っていく。

【資料2 第5次地域福祉活動計画 令和4年度取り組み報告書まとめ参照】

令和4年度に実施したシンポジウム・講演会・講座などを17の報告書にまとめた。ここでは参考として、取り組み報告書№1を添付したが、計画、実施、参加者の意見や声、実施前や実施後の参加者の変化、成果、課題、考察、次回に向けての分析を行っている。17の事業を取り組み報告書で共有している。また、資料3の令和4年度事業成果と、令和5年度事業目標では、委員会等の報告になる。練馬区

社協の各部署が横断的に繋がり、委員会等で活動した内容を記載しているのでお目通しいただきたい。新型コロナウイルスが今年の5月から5類になったが、コロナ禍においてもできることはないか考え、活動を続けてきた。今まで相談に結びつかなかった人たちなどの地域や生活の課題が新たに顕在化したからこそ各事業において今までと違う繋がりが生まれ、さらに当事者が自分の思いや体験を語り前に出ることが出来た。誰でも「ともにできる」活動のエピソードを通して、住民に伝え、地域と共に一緒に考えていくこと、相談に繋がらない人たちに対しても、しっかり発信できることの大切さが見えて来た。令和5年度は、さらに見えてきた課題を活動に繋げていきたい。

職員：資料4 推進評価チームの取り組みを報告する。懇談会チームではコロナ禍はオンライン併用で行ってきたが、コロナ以前の対面に戻していきたい。開催予定時期は9月に大泉地区、10月に石神井地区、11月に光が丘地区、12月に練馬地区を考えている。表の左側にメンバーを入れている。委員の皆様にも地区別にご担当をお願いできればと考えている。

ネリーズ通信チームは、より多くの方に読んでもらえる紙面づくりを目指して、6・9・12・3月の年4回発行に取り組んでいく。メンバーは現状、委員長のみのため、新たな委員にチームに関わっていただければと考えている。

ホームページチームは、Facebook や YouTube を活用しながら情報発信に努めていく。その際に、文言を工夫し、検索されやすくしていくことでホームページにたどり着きやすくできるように意識をしていく。

キーパーソン事例チームは、この後事例を用いて説明する。継続して事例を積み重ねていくことで分析を進めていく。

評価チームは、令和4年度の各部署委員会チーム等との取り組みについて①～④までをお示したものを元に、成果や課題の整理を行っている。第6次計画の策定に向け、新たに骨子チームを設け、骨子案作成や内容の検討を行う。策定・推進評価委員会内でのグループディスカッションに加えて策定委員と社協職員のグループインタビューとディスカッションから見えてきた課題の整理を行い、地域活動団体のヒアリングを進めて行くことで第6次計画の取り組み検討を行っていく。メンバーには複数の委員に加わっていただく。

【資料5：事例④～関わり続ける～ 参照】

ほっとサポートねりまから出た事例。これまで事例を読み進めて行く中で誰が誰なのかわかりにくいという声も出ていたので、最初に登場する人をシート右上に示した。今回はAさん、B支援員、Cさん家族、ほっと専門員になっている。事例の概要は、長年Aさんを支えていたCさん、Cさん自身も支援が必要な状態であることに気が付いたB支援員、まだ自分からヘルプを出していないCさんにどこまで関わって良いか悩みながらほっとサポートの専門員と一緒に関わり続け、最終的に支援に繋がっていったという事例。具体的にAさんは元々自治会長を務めていて、地域のために精力的に活動されていた。現状では、認知症でほっとB支援員が支援していた。2コマ目、Aさんから預かった自治会費を定期的に自治会の会計係だったCさんに届けていくことで関係を作っていた。Cさんが会計係を終えた後も、以前からお世話になっていたAさんだからと言うことで、引き続き届けていた。

それ以外にも認知症の症状が進行したAさんを心配して普段の生活から見守りを行っていた。3コマ目、B支援員が定期的にCさんと関わる中で、Cさんの夫が認知症ではないかと気づきがあった。そのことをほっと専門員に報告している。Cさんの二人のお子さんにも難病があると聞いて、世帯として何らかの支援が必要ではないかと感じていた。B支援員としては、まだヘルプを出していないCさんにどこまで関わったら良いかという悩みを持ちながら、困ったことがあれば連絡してほしいと専門員から伝えていた。4コマ目、そんなある日、Cさんからほっとサポートねりまに苦情の電話がかかってきた。後々、Cさんの勘違いだったことが分かり、Cさんから謝罪があったが、普段のCさんの様子を知っていたB支援員としては認知症のご主人がいて、難病のお子さんが2人いる中で余裕が無くなってきてし

まっていたのではないかという気づきがあった。5コマ目、ほっと専門員からCさんに、ほっとサポートねりまに相談が出来ることに加え、保健相談所や地域包括支援センターについてもお伝えすることが出来た。そのことで、Cさんのご主人の入院やお子さんたちへの支援体制を整えていくなど必要な資源に結びつくことが出来たという事例。今回より事例のポイントを示している。「アンテナを張る」、「気づく」、「共有する」、「協力・連携、働きかける」といったポイントを示した。キーパーソン、ネリーズ、地域福祉コーディネーター3者の関係の中に、今回登場しているCさん、B支援員、ほっと専門員を落とし込み、示している。可視化についてより理解しやすいよう模索しながら形を変えて示した。

キーパーソンチームで取り組んでいる委員から一言ずつお願いする。

委員：キーパーソンチームが活動を始めて2年になるが、今回挙げて頂いたように色々な事例をまとめていく中で、事例のポイント（アンテナ、気づく、共有する、協力、連携、働きかける）という流れが大体のパターンとしてあると思っている。私たちが行っている活動の中でもある過程に対する気づくスタッフがキーパーソンになっていて、そこから社協に協力を要請したりして、地域との関りを支えている。キーパーソン、ネリーズ、地域福祉コーディネーターの三つ巴になっているこの皆で協力出来ているが、事例ごとに関わっているとなかなか自分が何をやっているのかがわからないことが多々あり、それをキーパーソンチームで可視化していく作業が今後も求められているところである。今までは事例を中心にやってきたが、事例のポイントを多くの方にわかりやすくしていくことを行っていきたいと考えている。今自分がどんなかかわりをしているかと言う時に、事例のポイントに立ち返っていただければ、ありがたいと思っている。

副委員長：キーパーソンチームで皆さんと一緒に考えているが、最初に私が皆さんを混乱させた張本人だったかと思う。キーパーソンが相手から突き動かされて、動き始めるとき、キーパーソンは私ではないかと言われ、私ではなく、私を突き動かした人がキーパーソンだと言う言い方をし、凄く混乱させてしまった。

先ほど文京区の動画を見て、“コマジイ”は最初社協へ相談した。相談者がキーパーソンになる事もあるし、それから次に出てきた馬場さんは、自分から社会貢献したいと居場所を作りたいと言って動き出した。典型的なキーパーソンだと思う。キーパーソンというのもそういった意味では色々なタイプの方がいて、必ずしも、こういう人がキーパーソンと言えないと思うが、キーパーソンチームで突き動かす、突き動かされたとよく話に出た。地域で色々な形で困っているときに困っていると言えない、そういった人たちに気づいていくことがネリーズの(役割)であると思う。今回評価チームの資料を見ながらボラセンゼミの中で、キーパーソン的な人を発掘しているのだなということを見せて頂いた。そんな感じでどんどん地域の人たちを発掘して行って、キーパーソンになってもらえたら、暮らしやすい地域が作られていくのかと改めて思った。

委員：この事例の良さは、地域住民の人が前面に出ているというところである。これが社協の活動であると感じ、凄く良い。副委員長からの話で「困っている人は困っていると言えない」という良いキーワードがあった。これはすごく大事なことで、誰が困っていることを引き出していくかが、とても難しいことだと思うが、それが分かる事例で、図でいうとほっとB支援員は地域福祉コーディネーターでもあるが、地域住民のネリーズ的なイメージも持てる。動画では、社協がなんでも屋さんというイメージは違和感があったが、そのような活動を見せていくことが大事。見えにくい事例を可視化することが重要で共有していくことが大切である。

委員：この事例を拝見したときに、一つのポイントとして、ほっと専門員と支援員は地域福祉コーディネーターに位置付けられているが、B支援員はどちらかという地域住民に近い形で気づきの中で動いている。ほっと専門員はもともと地域福祉権利擁護事業の専門員という位置づけであるが、地域福祉コーディネーターの役割を担っていることが素晴らしいと思う。事業がどんどん増えていくと、事業中心に仕事になってしまうが、練馬区社協の特徴は地域福祉コーディネーターが練馬区の力を借りながら、

全ての職員が地域福祉コーディネーターという気構えで事業を担当している中で、支援者が地域と常に関わり続けていることが、このような事例が出てくることにつながっているかと思う。練馬らしい地域福祉コーディネーターというものは模索し続けていって、地域によっては相談の入り口を広げることを重層とし、なんでも相談と捉えて終わりのようなこともあるが、重層の特徴は相談が入ってきた時に地域住民に還元して、地域と一緒に参加の場を作っていくなど、練馬としても取り組んできたということ、文京は文京、練馬は練馬とし、ほんと専門員が地域福祉コーディネーターとして表せることは素敵なことだと思う。

職員：この事例は権利擁護センターが出した事例でCさんや、B支援員がどんな役割をしていたのかを整理してみた。この取り組み事例を策定委員会で共有することもそうであるが、権利擁護センターでも生活支援員の定例会があるので、そこでも共有していきながら、生活支援員が地域に出ていく中でこんな視点も良いかなとか、こんなことできるかなということを広げていくと、より良いと思う。気がついたときに、地域福祉コーディネーターの役割を果たしている専門員に共有しながら他にも出来る事を考えて行けたらと思っている。

7. 第6次地域福祉活動計画策定に向けて

職員：昨年度の策定・推進評価委員会では第6次計画策定に向け、日々の活動や業務の中で課題と感じていることなどをテーマにグループディスカッションを2回行った。

今年度は第6次地域福祉活動計画策定を見据え、これまでの地域福祉活動計画の取り組みを確認し、社協職員がどのような視点を持ち、日々の相談支援業務に対応しているのか共有する場を設定した。

グループインタビューは、やりがいや課題として感じていること、どのように対応していきたいかなどを参加者一人ひとりが話をし、率直に意見を交換し、意識を高める目的として実施した。グループインタビューには委員長と副委員長にも参加していただいた。

グループインタビューの開催内容については参考資料①を参照してほしい。また、併せて配布している参考資料②は骨子チームにて昨年度実施したグループディスカッションとグループインタビューにおいて見出されたキーワードを整理、まとめた内容である。

資料6は次期活動計画へ向けての骨子案をしめしていくことを目指して参考資料②をもとに案としてまとめた資料である。そのため、ディスカッションやインタビューの文脈が省略され、抽象的な表現になってしまっているところも多くある。こぼれおちてしまっている大切なエピソードはまだ多くあると感じている。この資料ではすくえていない、深めなければならないことなどについても、今後ご意見を賜りたい。

キーワードの抽出にあたり、どのような意見交換がなされていたのか振り返りながら、報告をする。なお、骨子チームには複数の委員にも加わっていただいている。

資料6は大きく「第5次地域福祉活動計画推進から見えてきた課題」と「第6次地域福祉活動計画策定にむけて」という2つに整理した。

「課題」として整理した項目は「複合的な課題を抱えた世帯への支援」「地域の中の孤立」「触法・再犯を繰り返す人への支援」「コロナ禍から見えてきた課題」「事業推進での課題」としている。

複合的な課題を抱えた世帯への支援としてキーワードは8050問題・ダブルケア世帯ヤングケアラー・障害のある子と高齢の親・DVとなった。グループインタビューに参加したかたくり・白百合・きらら・ういんぐの職員からは利用者のご家族の高齢化という話題があがった。

きららやういんぐでは利用者の多くが40歳代後半から50歳代になっているということから、親御さんも高齢となり、利用者だけではなく、家族への支援の必要性が高くなっている。

白百合・かたくりの職員からは障老介護という問題も重なるエピソードも語られた。利用者の連絡帳に「いつになったら解放されるのか」と親からの吐露があったという話もでていいる。歳を重ねるといいう、

少しずつ状況が変化してきた課題は、当事者が「変化」という認識をもちづらく、「これまでやってきたから大丈夫、まだ大丈夫」と知らず知らずのうちに抱え込んでしまう傾向がある。

つづいて、地域の中の孤立、触法・再犯を繰り返す人への支援について説明する。「8050問題」は取り上げられることも多い課題だが、いじめや不登校という学齢期の問題が、その後「ひきこもり」などの社会的孤立という課題につながってしまうこともある。

相談は、当事者本人からだけではなく、家族からの場合も多く、当事者本人と関係を築くまでに時間がかかることが多い。また、当事者本人から「支援を求めている」と言われてしまうと、そこで相談が中断してしまうこともある。ひきこもり当事者の方の「相談を求めている」という表現が必ずしも本心ではない場合もあるが、「支援が必要」と感じながら、それ以上、踏み込んでいくことが難しくなる。しかし、社会との接点が少なかった方が、社会福祉法人のネットワークで行っている野菜の収穫に参加し、フードバンクに野菜を届けることができたという取り組みもあった。そこに至るまでには時間がかかったが、相談者が社会参加への一歩を踏み出した時には、職員もうれしい気持ちになり、やりがいを感じた。

また、町会加入者の減少にも見られるように、近隣住民とのつながりが希薄となり、災害時の助け合いへの課題となるという話もあった。日頃から顔の見える関係性の構築をどのようにすすめていけるか、いざというときに備え、考えておくことは多くある。

つづいてコロナ禍から見えてきた課題。コロナ禍での特例貸付や生活困窮者への給付制度は、今まで社協の存在を知らなかった方と関わる契機となり、日本に暮らす外国籍の方への支援や不安定な就労環境といった、新たな生活課題も見えた。

「特例貸付対応時は借金やお金のやりくりなど根本的な相談支援が難しかったが、コロナ禍も落ち着きを見せてきたことで、相談支援をすすめることができる状況になってきている」という意見もでた。これまで出会った方への相談支援を振り返り、どのような情報提供が必要とされているのか検討をすすめている。

新型コロナウイルスは誰もが当事者になりうるという不安を共有する機会となった。皆が体験した「不安」という感覚を共有し、支えあうことの大切さを忘れないよう、今後の取り組みに活かしていきたい。

これらの課題を踏まえ、次期活動計画に向けて、大切にしたい視点を第6次地域福祉活動計画策定にむけての内容としてまとめた。

当事者の力を活かす、「福祉の支え手・受け手という関係を越える」という言葉は、多くの場で上がった話題である。

委員からは、「相談者は相談にのってもらった経験はしているが、いつも“被害者”“弱者”の状態のまま。その中には自身のDVなどの経験を“同じような経験をしている他の人のために活かしたい”という想いを強くもっている方もおり、「何かできることないですか?」と言ってくれる」というエピソードを紹介していただいた。

当事者はその経験を生き抜いてきたという強さがある。「自身の経験を語る強さ」という知恵を活かすため、支援者としてどのように励まし、寄り添って一緒にやっていくかが大切なのではないかという指摘であった。当事者と共に、一緒につくりあげるような場があれば、その力を実感する機会も増えるのではないかと考えている。

包括的な相談支援では、つながり続ける相談支援、社会参加に向けた支援などのキーワードがあがった。これまでも練馬区社協では丁寧な相談支援を心掛けること、「職員一人ひとりが地域福祉コーディネーターである」という意識をもち業務にあたっている。これからも、地域に出向き、情報をキャッチし、関係機関とともに地域課題の解決に向けて住民の方とともに取り組んでいきたい。

地域づくりの視点では「地域福祉の主人公は地域住民である」というキーワードがあがった。

地域課題を最初にキャッチするのは地域住民であり、課題をキャッチしている地域の方とつながりを

深めていくことが必要である。声をあげることが難しい方へのアウトリーチなど、専門職だけでは対応に限界があることについては、練馬区社協として取り組んできた「ネリーズ」の存在は大きな力となる。地域福祉への意識の醸成、「ネリーズマインド」の活性化のためには、例えば、広報分野でのさまざまな働きかけなどの工夫も求められている。

分野を超えたネットワークの構築では「法人ネットの活用」「ねりま☆共生フォーラムの充実」などのワードがあげられた。多様化・複雑化した課題に対応していくことは、1つの機関でできることではない。先ほど法人ネットのつながりで社会参加をされた方の例を出したが、関係機関との協働といったネットワークづくりは様々な課題解決の方法を構築するために必須である。

また、再犯の予防に向けた取り組みについては、医療や司法など福祉分野を超えたつながりの構築が重要なテーマである。様々なネットワークづくりのために、社協のそれぞれの拠点を活用していきたい。第5次地域福祉活動計画では、様々な背景を持つ人々が、地域社会で当たり前のように暮らせるような社会を目指すため「つながり支えあう地域をつくる」と「それぞれの生き方を支えあう」を実践の柱とした。

今回ディスカッションやインタビューであがった、「複合化する相談課題」へ対応していくためには、個々の地域生活を支援していくこと、社会的孤立や排除を生まない地域をつくる、地域に働きかけるといったことが重要な視点となる。

第6次地域福祉活動計画作成にあたっては、第5次計画で理念・柱として据えてきたこれらの実践は継承しつつ、上述の課題と今後の方向性を踏まえ、骨子や内容を検討していきたい。

これまで策定委員や職員のグループディスカッション等を行ったが、地域の方々の声も聞けるよう、今後は地区別懇談会や地域福祉活動団体へのヒアリングも予定している。

現段階でこぼれ落ちている大切なエピソードはまだ多くあると思われ、そうした内容についても第6次活動計画へ反映させていきたい。

地域福祉団体へのヒアリングについては、委員の皆様にもご一緒していただければと考えており、8月上旬にメールにてお声掛けをさせていただきたい。よろしく願う。

委員：文京区社協の映像ビジュアルで見たものが印象に残っている。事例④について漫画になっておりよくわかった。私はこの資料6の裏面にネリーズマインドを広げようとして書いてあるが、深く浸透させて意味あるものにするため、ネリーズの方々がよくわかるビジュアルをあげて行い、自分の活動が地域を良くしていると広めていくことが必要だと思う。第6次計画についてはネリーズをどう活用するかに重点をおいて考えた方が良く思う。ネリーズをもっと広げ、分かり易く具体的に説明し、どう集めて、より深く意味のあるものにするかが、私は重要であると思う。

委員長：職員の皆さんから話を聞いてきたが、せっかく地域の皆さんに参加いただいているので、社協への期待や社協と一緒にやりたいことなどご意見を頂戴したい。

委員：団塊世代の方が、75歳後期高齢者になるのが2025年。後期高齢者になったから大変だということではなく、さらに、第6次計画とは別の話であるが、労働人口も減っていくし、社会全体も働く人が減っていくが、社協として何が出来るのだろうかとなった時、今後やる事が広がる中で、社協だけが何かをするのではない。社会全体の事でもあるが一人ひとりのやる事が多すぎて、職員自身が倒れてしまうのが心配になると思う。第6次計画は進めて行くが、他の法人を含めて、全部自分だけでやろうとは思わずにやっていただきたい。社協の理念が「ひとりの不幸も見逃さない」その理念は凄く共感するし、理念を実現するために、誰かがやらなければならないだけではなく、支えるだけでなく、互いに支えられるといった本当のノーマライゼーションを目指す。障害者だから出来ないでなく、後期高齢者だから支えられるのではなく、高齢者も元気に死ぬまで働いていきたい方は、応援していきたいとおもうし、実際に私の法人も後期高齢者になったからではなく、本人は死ぬまで働き続けたいのであれば希望をかなえたいし、一人ひとりが無理のない社会になっていければと思っている。そのために社協も全部をやるのではなく、何らかの仕組みが第6次計画には必要ではないかと思っている。

委員：社協の活動（地域福祉活動計画）は、社協が何かするのではなく、我々地域住民がやっていくというものなので、要望は少し違和感があるが、ライスワークでなく、ライフワークだと思っていて、それでお金が入ってくれば良いことなのですが、ライスワークかライフワークか、ワークライフバランスなど色々あるが、幸せなのはライフワークとして仕事として出来るのが良いと思う。2025年問題はありますが、年齢がきたからはい終わりではなく、色々な形で働き方や参加の仕方の受け皿として社協があって、ネリーズはそういった人の入口だと思うし、私たちの活動もみんな何かをしたいという形で協力してくれる方たちが来てくれるので、地域の人を巻き込んでいくためにも僕らが出ていく必要があります、強いて期待することを言えば、そういった人たちを見つけてほしい、そういったことを引き続き取り組んでいてもらいたいと思うし、お願いしてやってもらうのではなく僕らも一緒にやる。本当の意味で支え合うということではないかと思っている。スタッフだからとか利用者だからではなく、なるべく分けないようにしている。お互い出来ることをやっていく、障害があろうがなかろうが関係なくということが本当の支え合いだと思う。その視点をより深めていきたいし、深めていく必要がある。第6次計画でも重要になると思う。

委員：孤立や複合的な家庭への思いがあるのでテレビなどで報道されている孤立した家庭が隣近所もわからなかったなど、声は聞こえていたけれど何か行動にすることができないくらいの距離感があってそれがとても残念だと思う。実際にそこまででなくとも、私たちのところにきて元気になった人たちは良いが、そのような人たちが地域の中でこっそりとしようとするのが残念で、私などではいけないと言われる人たちが地域で巻き込んでいき、自信を持って生活をしていくことで、様々な問題が解決するのではないかと思う。もちろん相談などは私たちが取り組んでいくことであるが、そこに繋げていくことがすごく大事だと思う。今はそんな人たちに社協に相談をしに行くように伝えているが、その窓口があることさえも知らない。何か具体的な問題がないと行ってはいけないという感覚で、自分が行くところではないという認識の人もいるかもしれないし、高齢者や障害者の方の支援をしているところと思っているが、本来は誰でも年をとり病気になるなど大変な思いをすることはあるので、その時に頼るところがあるということをなんとか伝えていくことが大切だと思う。先ほど支援を断るといった話があったが、どうして発信しない、出来ないのだろうということが大きな問題に感じていて、その部分で関係作りを含めて考えていくことが重要だと感じた。残念なニュースが多い中で、練馬にはそうなって欲しくない。良い地域になれば良いと思う。

委員：民生委員が70歳以上一人暮らしの方の調査をしている。民生委員からの意見を聞いていると、人との関りを希望しない方がいる。民生委員が行っても、「いらない」や「あまりこないでくれ」など、色々なことを言われる。民生委員と言えば大体わかっている年齢層ではあると思うが、町会にも未加入や、やめてしまう人がいて、現在30%を割ってしまっているのではないかと思う。そうした方が非常にいる。人と人とのつながりが無いので、隣近所が困っていてもわからないし、子どもの問題なども同様に家庭の問題にある。先日校長先生とお話しした際にも家庭問題を問題視しており、学校生活ではなんともなくても家庭だと親の影響が強いので、子どもの気持ちも安定せず、その人たちの支援をしたいと思っている。何かを発信してもらえればよいが、そのようなことがないと支援が遅れてしまうのではないかと。8050問題も同様に、発信できる人が発信してもらえたら何かしらの解決方法が見えてくるが、それが出来ずに自分が苦しんで、そのままにしてしまい残念な事件が起きるなどさみしく思う。地域の中の孤立を防ぐことをうたっているが、そのあたりは世間一般に伝わると思うのでしっかりと取り組んでいてもらえたらと思う。

委員：先日別の会議体で8050問題に関して。田中委員からも家庭問題の話が出たが50歳という、私の息子世代で、育てたのは我々の世代であることを問題提起した。私たちの世代は昭和27、昭和28年に中学から高校に行ったが、8割以上の方が、中学を出て、社会人になり生活することを選んできた。その後30年代に戦争は終わったと経済白書にも出て、池田内閣による所得倍增計画の話が出て高度経

済成長へと変わった。中学校卒業後、技術を磨き、技術オリンピックで優勝するなど、日本の経済発展を支えた。ところが、(正しいか判らないが)自分たちが親になったら、「自分たちは貧しかったので学校へ行けなかった」から、少なくとも高校は卒業出来るよう、子どもたちに塾を掛け持ちさせて、そうすると全国で塾が沢山出来た。ゆえに、学歴はついた。

当時の教育が、30年、40年先に出るのだと思い、現在の教育はどうするか。現在は不登校が全国で24万人もいるが家庭に問題があることもある。社協も8050問題等対応をしていかなければならないが、子ども達にははたらくということを社会全体で共有してこの8050問題になった経緯を考えていかなければならないと私は考えている。

委員：先ほど文京区のビデオを見て、お年寄りが子どもに声をかけたりしていて、私も最近そんなことがあって、私はマンションに住んでいるが、仕事から帰るときにマンションの駐輪場で、たまたま親子連れに会うことがあうことがあり、子どもが飲み物を飲んでいたので、私が「おいしそうな飲み物を飲んでいるね」と声を掛けたらお母さんにキッと睨まれることがあった。怪しい親父に写ったのだと思うが、同じマンションの住民でもそんなものなのかと寂しい思いをした。8050問題の話も出ていたが、障害のある子どもと、高齢の親の問題があるが、障害の子どもがいる世帯はこの逆になっている。50の障害の子どもを、80の親が見ている。そのことを少し共有しておきたいと思った。これもとても深刻な問題になっている。色々な問題があることを第6次計画に入れていかなければならないと思うが、風呂敷を広げ過ぎていることも心配をしている。そのあたりのメリハリも大事な気がしている。社協に求めることは、もっと認知度を上げること、私自身は仕事柄社協の事はよくわかっているが、もう少し、どのように社協の存在を知ってもらうかが大事で、そこが始まりになるのではないかと考えている。そんな活動から認知度を高めていければ良いと考えている。

委員：社協はスーパーマンの集まりではないし、社協が解決できるわけではない。厳しい状況に置かれる人々に対して、例えば認知度を上げる等のことに対しては、社協は事業を行い目に見える活動をしていくことが認知度を上げていくことであつたが、現在は暗礁に乗り上げている。制度を作ると対象を決めることになる。現在ヤングケアラーの問題もその通りで、どこまでがヤングケアラーでと対象年齢など決めてしまうと、取り残されてしまう人が必ず出てくる。現在の制度の作り方は法律的には変わらないので少なくとも社協はそうした制度でいろいろな問題を切っていくという話ではない、だからやっていくのだということが出てくると非常に良いかと思う。今までは賃金労働が働くという話であつたが、地域で働くとか、知的障害の方の「傍(はた)を楽(らく)にする」つまり、周囲の人を楽にする、その人が存在しているから周りの人たちが集まってくる、そんな関係性に価値があるということを社協は発信していくことが、非常に大切になっていくのではないかと考えている。

委員：現職について3か月しか経過していないが、地域の団体の方と話をさせてもらっている。地域の課題を、自分たちの事としてとらえて活動している人たちが沢山いる。区の手が届かないところにもそうした方々が手を差し伸べて頂いているということはとても実感するところであつた。区では窓口に来た方や連絡を頂いた方に対しては案内をすることが出来るが、潜在的に声を上げられない方々に対しては、本日参加している委員の皆さんがしっかりとケアをして頂いているということは凄く感じている。そうした方々は区内にもたくさんいるので今後は、ネットワークなどが出来ないかと思う。それは私共や社協の仕事かもしれないが、そうしたネットワークを使って困りごとの解消や同じ境遇の方の共有、そうした案内をしあえる場があれば、区と協働してうまく解決できないかと今は感じているところである。団体についてはたくさんあり、まだ把握できていない団体も相当あると思うがそういった方も横のつながりや大きな輪で皆さんを助けていく・拾っていくような仕組みが出来ればよいと考えている。

委員：練馬区の地域福祉計画も、だれもが安心して暮らし続けられる地域を掲げている。練馬区の事業、社協の事業、ネリーズ、地域福祉コーディネーター、災害ボランティアセンターや権利擁護センターの取り組みなど、様々載っている。区では手の届かないところを社協に補完してもらっていると思う。

地域に根付いた活動をしている社協から、色々な意見をもらいながら、必要な事業を検討していく。

委員：対面会議では前委員長が言っていた、練馬社協の特徴である職員も一緒に参加して考えようとしている姿勢がみえたと思う。そのことを含めて、地域福祉コーディネーターであるという社協職員全員がその気構えをもって、事業を使いながら、また事業と繋がっている人と繋がっているということで、色々なことを思い描きながら一人ひとりご自身の仕事を抱えている。それを横に繋げていくことで、やりがいも出てくるのかなと思っている。あきらめてしまっている人や、人とのかかわりを持ちたくない人がいっぱいいることも、あきらめている何かを壊していくことも必要だと思う。あきらめていることが何かを考えて、突破できたことを広げていくことがネリーズマインドだと思うし、第4次、5次計画ではかるたを広げていったことも成功してきた体験でもあるし、文京区社協の映像がわかりやすかったということも真摯に受け止めてそういったものを練馬でも作っていったらと思う。

委員：(令和5年度に法律が変わり)令和6年4月から段階的に障害者雇用率が上がる。令和8年には2.7%になる。これは一般企業の話で、区はさらに3%になる。企業にとって障害者雇用を始めていることは良いことと悪いこともある。仕事になかなかついていけない人、人間関係のトラブルを起こす人など、1年以内に辞める人が多く、1日でやめた人もいる。今後の動向も知っていただき、取り組むべきことかと思う。

職員：骨子チームを担当しているが、グループインタビューとグループディスカッションのキーワードということで皆さんの意見をまとめた。簡潔にまとめてしまったが、エピソードや具体例が抜けており、今後は肉付けを行っていきたい。委員の方から社協だけでやるのではなく一緒にやっていくという力強い言葉をいただいた。社協だけで計画を決めていくものではないし、地域住民の皆さんと一緒に計画をつくり、実施していければと考えているため、引き続きお願い申し上げます。

8. まとめ

副委員長：制度の狭間を救ってくれる人がいる。地域は資源の宝庫である。社協が知らない活動をしている方もいると思う。そういう人達がキーパーソンであると思っている。そういう人達を発掘することを社協はやっていかななくてはならない。先ほど「はたをらくにする」「支援する・される」の話があったが、人手が足りなくなったから雇用率の関係ではなく、支援される側が存在していることが周りを変えていく力となること、そのことにまわりが余り気づいていないことを社協が示していくことが大切である。職員のグループインタビューに参加した際に、職員が自分の働いている部署のことで一生懸命で社協全体が見えないという話があがったが、他の委員や地域のキーパーソンと職員がもっと話し合える時間がつくれるとよい。

委員長：皆でいろいろと議論しているが、社協を全く知らない人がいるのはさみしい。エピソードを重ねることで社協の取り組みが地域の人と分かち合えることが大切である。先ほどメリハリの話が出たが、第6次計画に向けて何を大事にしていくか皆さんと今後も話せればと思う。

9. その他

職員：職員と地域の人と話せる場を作る話があったが、今後団体ヒアリングの場でもできればと思う。

次回の日程：令和5年12月6日(水) 18時30分から

以上